

みと感じているうちに、汽車はどんどん故郷、高岡に向かつて走り続けていました。途中で弁当の差し入れなどの温かい人情に接しながら、やっとの思いで、昭和二十一年八月、高岡の駅に降り立ちました。

早いものでそれから半世紀。今、世の中はまさに平和と繁栄の坩堝くわぼの中。昔のことを語る人も少なくない、あの労苦は忘れ去られつつあります。こんな時代を経て今日の平和があるのだということ、せめて知ってもらいたいものと思う一念で、駄文ですが書きました。

戦争と女の悲劇

東京都 阿久津 カツ

一 お見合いと結婚

関東地方の北部に横たわる那須連峰が分水嶺となつて、福島県側と栃木県側とに分かれて流れ落ちる水の

恵みによって、肥沃な関東平野の農村地帯が形成されています。

その那須の麓に、私の故郷、河内郡金田村がありました。

昭和十九（一九四四）年三月、そのころ大東亜戦争はますます激しさを増し、村の若者は次々と戦場に駆り出されて、村には老人、女、子供の姿しか見られないうようになってきました。私は教師をしていましたが、初めて男性とお見合いをすることとなりました。その話は一月の終わりがらから始まっていたのです。

隣町で古着売りを商売にしている六十歳近い年のおばさんが話を持ってきたのです。この人は、仲人をするにこと五十数回のベテランだったのです。

戦時中は新しい衣料を手に入れることはほとんどできず、古着が大変に重宝がられたものです。農家でも着物を手に入れるために米と交換したくらいです。

その日も母に、若い女物の着物を見せていたのですが、私の姿を見て、「よい縁談があるんだが。お嫁に出しませんか」と、商売をそっちのけにして、仲人の

ことの方に熱が入っていました。

急な話に返事に困った母は、ただにこにこした顔をするばかりでした。若い男性が少なくなっていて嫁入りの話もなかなか無かった時代だけに、こんな話はやはり内心では嬉しかったのだと思います。おばさんは、ベテラン仲人らしくいろいろと話し始めました。

相手は良家の長男で体格も立派で、この一月に戦地から帰ってきたばかりの二十六歳の青年だそうです。

おばさんは母に「良い縁談だから、一度会ってみてはどうですか」と、熱心に話していました。

母もこのおばさんの積極的な話につりこまれて、断るのも惜しいと思ったのでしょう、ただ笑いながら聞いているばかりでした。当時は、「男一人に女はトラック三台」と言われていました。それは戦争で適齢期の男性は兵隊に行ってしまう、残っている男性は体の弱い人や障害のある人ばかりだったからです。だから年ごろの娘を持っている家では、良縁を求めるのに大変な苦勞をしていたのです。夜になって母は、父と遅くまでその話をしていました。

翌日、父母が私を呼んで話し合いました。この縁談に積極的な母に対して、父は消極的で寂しそうな話しぶりで、父の顔を見ると私は何も言えませんでした。しかしその反面、私はその当時二十四歳でしたから、いわゆる「婚期の遅れた娘」という立場にあったので、両親さえ賛成ならばお嫁に行ってもよいと内心では思っていました。

三日後、古着のつまった大きな風呂敷包みを背負ったおばさんが、にこにこしながら玄関から入ってきて開口一番、「決まったかね!」と言いながら荷物を板の間にとすんとおろし、腰を伸ばしたりたいたいしたりして、「年だね!」と独り言をいいながら罎いし裏端に上がり腰をおろしました。

父母がよく話し合っただけだったので、返事は簡単でした。「よろしくお願い致します」と、父が深く深く頭を下げました。これですべてが決まってしまうました。

おばさんは満足そうに満面に笑みを浮かべて、「よかったです。よかったです。相手様もこの吉報を待っているん

ですよ」と言つて、商売そつちのけで、風呂敷包みをほどこともなく、そのまままた、背負つて急いで帰つていきました。両親にとつては大きな決断で、その後は気落ちからか、あるいは寂しさからかしばらく無言が続いていました。

その後、お見合い、結納も順調に終わり、昭和十九年五月七日に村の神社で結婚式を挙げることとなりました。それまでの日々は本当に慌ただしいことでした。

式の最中、二人そろつて玉串を奉納し、拝礼の際つい教師時代の癖が出て、新郎に向かって、「二礼、二拍手、一礼ですよ」と言つてしまいました。これが後々まで事有るごとに、主人からの攻撃材料になってしまいました。結婚式も無事に終わり新婚旅行にも行きましたが、途中で兵營が見えるたびに、「隠れろ」と主人が連発するので、楽しいはずの新婚旅行も隠れん坊旅行となつてしまい、後々までの笑い草となつてしまいました。

二 渡満の決意

新婚旅行から帰るとすぐに渡満の準備に入りました。主人の姉一家のいる北満、佳木斯に行くことは、お見合いのときに話があつてお互いに承知をしていたことです。五月十五日に出発することとなりましたので、物心両面についての準備を始めましたが、金田村から外に出るのは初めてのことですから、不安で不安でいっぱいでした。しかしこうなつたのも運命と思ひ、ある意味ではあきらめの境地でした。複雑な心境のままで大勢の人々に見送られて故郷の田舎駅から出発しました。

朝鮮の釜山に行き、そこから牡丹江を経由して四日目の早朝に目的地の佳木斯駅に到着しました。広野の中の駅でしたので戸惑うばかりでした。

主人の姉さんが、マーチョ（馬車）に乗つて出迎えてくれましたので、それに乗つて、姉さん一家の家に着きました。家に着いたときには、睡眠不足と環境の激変による精神的肉体的疲労で、立ってられない状態でした。しばらく休んでいるうちに少しは回復し

てきましたが、その夜は興奮していてなかなか寝付かれませんでした。そこで約二カ月を過ごしているうちに、佳木斯神社の近くの一軒家に留守番として住むことが出来るようになり、やっと二人だけの水入らずの生活ができるようになりました。貯金もでき、そのうちにお腹には子供を宿し、平和で楽しい、幸福な毎日となりました。

三 ソ連軍の不法侵入

忘れもしない昭和二十年七月二十二日、この日は朝から太平洋諸島での日本軍の玉砕のニュースが報じられていました。

主人は佳木斯の役所で兵事係も兼ねていましたので、出勤するとあちらこちらに召集令状を持っていておりました。その日も、「毎日召集令状を渡すのがつらいよ。特に最近は多くなってきた、役所内でも空席が目立つようになってきた。今日も多いのかなあ。いやだね」と、独り言を言いながら出勤して行きました。が、今までになかった寂しそうな主人の言葉と、出掛けるその後ろ姿を見て、何かしら不吉な予感がして

落ち着きませんでした。

生まれたばかりの子供があまりにも泣くので、抱いて外に出てあやしていましたら、人通りのめっきり少なくなった橋の上で、手を振っている主人を見付けました。

その時、全身の血がさっと引いて行くような悪い予感がしました。笑顔で近づいてきた主人は、「きたよ」とただ一言言いながら、私に封筒のようなものを渡しました。それを見た私は召集令状であることがすぐに分かり、手が震えて全身の力が抜けて落ちるような気持ちになりました。子供を抱いたまま主人にしがみ付き、いつ家の中に入ったのかも分からないほど気が動転していました。

ただただ主人だけを頼りにここ佳木斯まできましたのに、これから幼い赤子を連れて、東も西も定かでない異郷でどうして生きて行けばよいのか、それだけが頭の中で浮かんだり消えたりしていました。

夕方、日ごろから主人がかわいがっていた満人のボーイさんがきて、「長くても二年ぐらいで帰ってこ

れるでしょうから、元気を出して頑張ってください。それまで私たちが協力しますから心配しないで行ってください」と、私たちを力づけてくれました。子供が生まれたときにも、「日本の両親にも子供を見せに行ってください。私がお金を出してあげますから」と言ってくれたボーイさんで、その気持ちが嬉しくて感謝していたものです。「満人という民族は人をなかなか信用しないが、いったん信用すると今度は最後まで尽くしてくれる」と、いつか主人から聞いていました。一度ならず二度までも好意に満ちた言葉をもらい、有り難く涙が出ました。

召集令状には、「七月二十四日午後二時に綏西の部隊に入隊すべし」と示されておりましたから、多少時間にも余裕があつて少しは気持ちにも落ち着きが出て、いろいろと考えることができました。二晩あるので今後のことを主人とゆっくり話し合いたいと思つていましたら、「出征祝い」をしたいといつて主人の友人たちが集まってきましたので、そのもてなしの料理作りに時間をとられてしまい、話をする暇もなく一夜

が明けてしまいました。

明朝は出発です。短い時間でも離れたくない気持ちでいっぱいでしたが、主人の好物を食べさせたいと思ひ、また料理作りに一生懸命でした。「入隊する日には必ず作つて食べさせるのよ」と言われて、母から教わっていた「赤飯」を作るなどして、残っていた一日も忙しく過ぎてしまいました。

翌朝、佳木斯駅まで見送りに行きましたが、出征を見送る人々で大混雑でした。帰り道は夢遊病者の如くに歩いていました。「しっかりしなさい。しっかりしなければ駄目よ」と、繰り返し繰り返し自分で自分に言い聞かせながら、子供を抱き締めて帰りました。家に入るとべつたりと座りこんでしまい、涙が止めどもなく流れ出して、子供の寝顔もかすんで見えないうらいでした。

そのころは、義姉一家はハイラルに転動していて、佳木斯には身内はおろか、よく知っている人もいなかったのです。佳木斯にきて一年と二カ月で、とうとう本当の二人ぼっちになってしまったのです。

ボーイさんは毎日のように来て薪割りや石炭運びなど冬を迎える準備を一生懸命にしてくれますし、休日にはその娘さんもきて子供の面倒を見てくれましたので、随分と心強く感謝の気持ちで毎日を過ごしていました。

八月九日の午後、珍しく飛行機の爆音が聞こえましたが、その瞬間地の底から揺れるような大音響が起きました。そのときには、ソ連機の爆撃とはつゆほどにも分かりませんでした、時間の経過と共にソ連機のものとなり、ソ連軍が日ソ不可侵条約を破って不法に国境から侵攻してきたことを知りました。

国境近くには主人がおりますので、その安否が心配になり、爆撃の恐ろしさも忘れておりました。そのうちに満拓地方事務所から全員集合するようとの連絡が入りましたので、急いで事務所に集まりました。

多くの人々が不安そうに何か話し合っておりませんが、そのうちに事務所の方が見えて、「ソ連軍が不法侵攻してきました。皆さんはすぐに荷物をまとめて、明朝までに事務所の倉庫に入れてください。そしてい

つでも出発できるように準備をしておいてください」と、興奮した声で伝えられました。家に戻る途中で、前線に向かっている多くの兵隊さんに会いましたが、笑顔の消えた姿がとても印象に残り、こっちも身の引き締まる思いでいっぱいになりました。

考えてもいなかった最悪の事態になり、主人がどうなっているのかと、不安と心配の交差する思いの中で荷造りをし、終わったときはもう九日の夜半が過ぎていました。

翌早朝、ボーイさんが自分のいとこを連れて荷物を運びにきてくれました。間もなく避難するという連絡が入りましたので、身支度を整えて子供を胸にくくりつけてリュックサックを背負い毛布を持って集合場所に急ぎました。

四 避難開始

「満拓佳木斯地方事務所」と書かれてある門をくぐって中庭に行きますと、大勢の人々がそれぞれに大きな荷物を持って集まっていました。私も皆さんの中に入って行きましたが、みんな心配そうにして小声で

話し合っているのに、意外にもその表情にはあまり心配事が表れずに明るくて、頼もしさを感じてほっとしました。顔をあまり知らない方も、「大丈夫よー!」と、私を励ましてくださいました。

佳木斯の駅まで四列縦隊になって行進しましたが、沿道に立ち並んでいた満人たちは、憎悪の気持ちいっぱい私たちを見ていたと思います。行列の両側を兵隊さんが警戒して歩いていましたので、手を出さような者はいませんでした。駅では警備の兵隊さんの誘導で無蓋貨車に分散して乗り込みましたが、やっと乗り込んだと思ったら汽笛と共に激しい衝撃を残して動き出しました。「これで、新京まではどうにか無事に行ける。新京に行けば満拓本社もあり、主人との連絡も何とか取れるかも知れない」と思いますと、いつときでも早く着くようにと祈らずにはおられませんでした。

列車は広野の中を速度を速めて走っていました。何時間ぐらいたってでしょうか、突然に広野の真ん中で停車してしまいました。各車両では、「どうしたのか」

とか「何かあったのか」という心配の声があがり始めましたが、そのうちに、線路づたいに息を荒立てながら係員が走ってきて、「皆さん、しばらく停車しますので、その間に用を済ませてください」と、怒鳴っていました。早速に貨車から降りたものの、何も無い野っ原の中でのことなので、どうしたらよいのか迷っていましたが、我慢もできずにいたので、各人は恥も外聞もなく草むらを利用して用を足しました。用を済まして、さて再び貨車に乗りとうとするが、貨車の床が高くて上がるのに苦勞をしました。手を引っ張る人とか下からおしりを押し上げる人でやっと貨車に戻れました。発車準備が整ったところで、また係員が走ってきて大きな声で怒鳴りました。「皆さん、そのまま聞いてください。今連絡があります、牡丹江は既にソ連軍に占拠されたそうです。これ以上は進めませんので、いったん千振開拓団に行き、そこでしばらく様子を見ることとしますので、皆さんは荷物を持って降りて集まってください」と、青ざめた顔で話すると急ぎ足で前の方に行ってしまいました。その何ともい

われぬ青い顔色と震えながらの話しぶりを聞いて、私たちも不安を感じました。

荷物を抱えて貨車から降り、みんなの列の中に入りましたが、千振開拓団の場所も知らない私は、皆さんの後について歩くよりほかありませんでした。

午後になって空が急に曇りだし今にも雨の降りそうな空模様になってきましたが、まだ千振開拓団はどこだか分からずに、ただ歩くしかありませんでした。

「降ってきそうだね!」と、三人の子供を連れて歩いている母親が、苦しそうにだれに話すということもなく独り言を言っているうちに、大きな雨粒が乾いた道から土ぼこりを上げ始めると瞬く間もなく、「ざーっ」と雨足の激しい降りとなり、たちまちに道路はぬかるみ状態になってしまいました。

一步一步と踏み出す足は前後左右に滑り、思うように足が動かずに転ぶ人も出てきました。私は左に毛布を抱え右手には傘を持って、子供が雨に濡れて風邪をひかないように傘の下に入れて注意しながら歩きました。が、滑るたびに雨水が子供の顔にかかったりして、

子供は泣き出してしまいました。子供を安心させようと思ひ顔を近づけて歩くと、今度は雨水が私の背中に流れてきますが、立ち止まることもできずに濡れるままでした。思いもかけない必死の避難行となり、子供と共に泣きながらの行進でした。

ぬかるみ道は大小各種の傘の行列となりました。子供のためにと持ってきたロシア毛布は水を含んで重くなり、持って歩くのもきつくなりました。そのときに中年の満人が近寄ってきて、「奥さん大変だね。私も同じ所に行きますからそれを持ってあげましょう」と、親切な言葉で話しながら私の抱えている毛布をひったくるようにして持って行ってしまいました。私はそれを取り戻す元気はありませんでした。

佳木斯時代のあの親切なボーイさんのような人かなと思って、気をゆるしてしまっただのが間違いでした。

結局は略奪されたことになりました。

行列が突然止まってしまいましたので、狭い農道に長い列ができてしまいました。もうだれもその理由を知りたいとも思わなくなりました。私もすぐそこま

でソ連兵がきていることも忘れて、ただ、休めてよかったですと思うだけでした。考える力も無くなっていて、ただ疲労困憊のみでした。

濡れた子供の体が心配になり、上衣の中に体を入れて肌で温めていました。雨足がちょっと弱まり小降りになってきたころ、「千振開拓団にはもうだれもいません。危険だから引き返します」と、前の方から伝言が伝わってきました。ソ連軍の侵攻の速さに驚き、前線にいるであろう主人のことが心配になりましたが、どうすることもならず、今はただ、無事を祈るのみでした。

また、もとの道を歩いて戻り、薄暮のころにやっと再び列車に乗ることができました。無蓋車は乗りにくいので苦労している人が多く、「早く、早く」と、けしかける声が無情に聞こえていました。

列車は、佳木斯方向に線路を引き返すようなかっこうで動き出しましたが、どうしたのか、子供が一人取り残されています。子供は列車に向かって走っていますがだんだんと離されるばかりです。母親は子供の

名前を必死になって呼んでいます。子供と列車の距離は遠のくばかりで、母親はそれこそ顔色をなくして、遠くに離れて行くわが子を指さして、「兵隊さん！ 子供をお願いします」と絶叫していますが、全速でひた走る列車の音にかき消されて聞こえません。親子の生き別れの悲劇と、あの悲痛な叫び声がいっまでも心の底にこびりついていて取れません。今でもはつきりと思い出されます。

列車は佳木斯駅を通過し、松花江の鉄橋を渡るころには夜もすっかり更けていましたが、遠くに見える市街地の方向に火の手が上がっているのははつきりと見えました。あまり気にもとまりませんでした。夜になると気温が急激に低下する大陸性気候は、無蓋車に乗っての避難行にはつらい夜となりました。列車の速度が夜の実際の寒気を倍加させてしまい、それこそ肌を刺すような寒さです。乗り物には弱い私ですが、子供が風に当たらないように向きをかえながら肌で温めていましたが、そのうちに子供の寝息を聞きながら、日中の疲れが出てきて、いつの間にか私も眠ってしま

いました。苦しそうな泣き声にはっとして目を覚ますと、子供の上に覆いかぶさるようにして眠っていたのでした。

知らないうちに子供が死んでいたということは度々ありましたので、私としても注意はしていたのですが、疲れていたのでついこのようになったのでしよう。

列車が止まるたびに、数人の子供の死体が線路脇に埋葬されているのを見ると、不安になり一晩に何回となく呼び起こすことがありました。親子して生きることに精いっぱい、月日のたつことは忘れておりました。列車は止まったり動いたりを繰り返しながら、何日かの昼ごろに緩化に到着しました。

「当分の間、緩化にとどまるかもしれません。状況を見てから新京に向かうようになります」と連絡があり、各班ごとに誘導されて、緩化飛行場の格納庫に収容されました。

格納庫の中は、広く寒々としていましたが、屋根があつて雨露をしのぐことができるのが嬉しかったで

す。「通路をあけて各自で好きな場所を取ってください」と言われましたので、子供のことを考えて中央を選び荷物を置いて、寝起きする場所を作りました。兵隊さんから軍用毛布をいただき、佳木斯を出てから初めて暖かい夜を過ごすことができました。食事は各班ごとに当番制で作りましたが、私たちの班は主婦が多く、その点は好都合でした。しかし夜は、ソ連の囚人兵が襲ってくる恐怖心で、安心して眠ることができずに毛布にくるまって、小さくなつてうとうとしながら夜を過ごしていました。

どこからともなく、子供を抱いていけばソ連兵は襲ってこないという話が伝わってきましたので、若い女性は真剣になって子供をさがし始めていましたが、実際にはそれほど効果はありませんでした。

ひどい話では、中年や老年の女性でも襲われたということも聞きました。屈辱に耐えきれずに自ら死を選んだ方もたくさんおられたということです。どんな時代でも、戦争というものには必ず女性の悲劇と犠牲はつきものであり、むごいことと思えます。銃に触った

ことも無い者が、女というだけで侮辱的な辱めを受けるのはなぜなのか理解に苦しみました。

男の姿になれば安心かもしれないと、だれいうとなく髪を切り丸坊主になって、顔に鍋ずみを塗り男性用のズボンをはき、各人思ひ思ひの男装で、夜に備えましたが、夜になると、男装はしてもやはり女性意識があり、怖さは同じでした。どこかで助けを求める悲痛な叫び声が聞こえてきますが、助けに行く手段もありません。ソ連兵もだんだんと利口になってきて、しまいには胸を触って見分けるようになりました。

ソ連兵から逃れるように毎日を過ごして一カ月が過ぎようとするある日、子供があまり咳をするので額で熱を計ってみました。少し熱っぽいだけで元気もあるので安心はしましたが、薬を与えたくてもだれも持っている人はなく、水で額を冷やしなから、「恵美子! 頑張つてね」と祈るだけの看病でした。

三日ばかり咳は出ていましたが、そのうちに熱も下がりましたのでほっとして安心しました。

五 新京での避難生活

それから数日後に新京行きの話が出てきましたので荷物をもとめ、心の準備をして一日も早く出発できるようにと待機をしていました。主人の様子を一刻でも早く知りたいという希望でいっぱいでした。そんな態勢で一週間過ぎ、やっと待望の新京行きの列車に乗ることができて南下しました。

列車は、晴天のさわやかな空気の中を走り続けており、車窓から大陸らしい広大な風景を眺めていると、かつて主人と一緒に見た牡丹江方面とは、また異なった景色に大陸の広さをしみじみと感じて、今までの苦労も忘れて見とれているうちにやっと新京駅に着き、そのまますぐに満拓本社に行きました。

満拓本社で早速、綏西方面の状況を尋ねましたが、連絡が取れずに状況は分からないということでした。牡丹江は焼け野原となっているという話も聞きました。

私たちの収容先は孟家屯の社宅と決まり、早速本社を出て途中満映の前を通って社宅に行きました。まだ

らかな道の両側に二階建ての家が何棟もあり、その右側の端の家の二階に落ち着きました。奥の六畳間に夫婦の方が入り、手前の一室に女三人と子供二人が住むこととなりました。生活用具はすべてそろっていたので、すぐに夕食の支度ができて、夜は久し振りに布団の中で手足を伸ばして、親子とも熟睡しました。北満から避難してきた者にとっては、新京は別世界のよう

に平和なところでした。それからの日常生活は、燃料にする枯れ草を集めたり駅に行って線路上に落ちている石炭を拾い、それを満人に売って生活費の一部にする毎日でした。駅にはソ連兵がいて危険でしたので、石炭拾いには四人一組で行くようにしていました。

あるとき、安全であることに慣れてしまった一人が、駅に近づき過ぎてソ連兵に捕まってしまう、「助けて！ 助けて！」と、悲壮な声で助けを求めましたが、みんな危険を感じていましたので助けに行く人はいませんでした。昼間のことでしたので、間もなく捕まった人も無事に帰ってきましたので、ほっと安心し

ました。それから、駅を避けて石炭拾いを続けました。

当時はまだ、駅長と機関士は日本人でしたから、列車が来るたびに「石炭をください」とお願いしますと、大きなスコップで何回も投げてくれました。逆境においての同胞の温かさには、嬉しくて感謝をしたものです。

孟家屯での生活にも落ち着きを取り戻しはじめたある日の午後のこと。入り口近くにいた奥さんが、「あっ！」と、驚きの声をあげながら私の肩をたたき、「奥さん、ご主人よ。ご主人が帰ってきたのよ！」と言うので、半信半疑で玄関の方を見ましたら、髭面によれよれの背広姿、やつれて目だけが光っています。紛れもなく主人が立っていました。言葉のない私に、主人は戸惑っているような様子でした。

「元気だったか？」の声に、私は気が戻り子供と共に主人に飛びつき、声をあげて泣きました。佳木斯出發のときから今日までの苦しかったこと、悲しかったこと、悔しかったことなどを一気にしゃべってしま

ました。話し終わったときには、胸の中が空虚となり、「よかった、よかった」と、うわごとのようなことを言っていたそりです。

「苦勞をかけたね。これからはおれがやるから心配するな」と言う主人の言葉に、ただただ熱い涙が流れるだけで、今までの疲れが一遍にとれてしまい、体が急に軽くなったような思ひでした。

主人は、風邪をひいていた子供の顔を見て、「息遣いがよくないなあ。明朝、病院に連れて行くから、今夜は暖かくして頭を冷やすしかないなあ」と言ひ、その夜は寝ずに看病しました。翌朝、病院に連れて行き診察の結果、「肺炎」と診断され入院しましたが、医者からは「薬が無いんです」と告げられ、悲嘆にくれていましたが、そのとき主人と一緒に死線を越えてここまで帰ってきた戦友の飯岡さんが、奥さんと共に見舞いに來られて、緑園地区に肺炎によく効く薬があるから連れて行くと言ひましたが、医者から、「動かせる状態ではない」と反對されてしまいました。

子供は一晚中、高熱にうなされて苦しんでいました

が、次の日の朝に両親の顔を交互に見ながら静かに息を引き取りました。主人が戻るのを待っていたかのようにして死んでしまった子供の顔に、涙が流れ落ちました。冬の到來を思わせるような寒い日に、近くに埋葬しました。

それから、すべてを忘れたくて夜は煙草巻きを、昼は満映前で立ち売りをして必死になって働きました。

主人はソ連軍の使役に出て、帰りには凍った麻袋を持ってきましたが、それを乾かして売ると使役の勞賃よりも高く売れました。使役もなくなったある日、同じ社宅に住んでいる人から、孟家屯駅の近くの日本軍倉庫に大量の麻線があるという情報を得ました。主人が「夜に偵察に行ってくる」と言ひましたので、私は石炭拾いのように多くのソ連兵を見ておりましたから、「危険ですから行かないでください」と反對しましたが、主人は「心配するな。彼らは夜は出てこないのだよ」と言ひ出て行きました。思ったより早く帰ってきて、「あった。あった。山になっていた」と、

宝の山を見付けたように喜んで話を続けました。翌朝、男性による麻線とりの話し合いがありました。

「日本の物だ、今夜とりに行こう」という主人の話に、「ソ連兵は銃を持っていて危険ではないかね」と心配する声が多くありましたが、主人は「ソ連軍との戦闘経験では、夜間には彼らは出てこないから安全だった。心配しないで私の後についてきなさい」と、その夜に倉庫に行くことに決まりました。夜になって四人で倉庫に行き、大きな麻線を持って帰ってきました。皆さんも自信を持ったようでした。

「麻線」とは麻袋を作る糸のことで、円形に巻かれていて一人では動かすこともできないような重い物でした。雪が降るとソリで運びましたから、運搬も容易で社宅には麻線の山ができました。連絡を受けた満人が馬車十台を連ねてきて、取引をし終わると荷物を積み、先頭に銃を持った公安員を乗せて帰って行きました。

主人が金を持って外に出ましたら、入れ替わりに先ほどの公安員が銃を構えながら入ってきて、「主人は

どこか」と銃口を向けて言いますので、「知りません」と答えると、「どこに行ったのか」とさらに聞くので、黙っているとそれ以上のことはせずに出て行きました。どうなることかと一時は驚きました。主人に知らせますと、「金を取り戻してきたのだから、心配しないでいいよ」とただ一言言って、また出て行ってしまいました。私にすれば初めての恐怖の場ですから、「心配するな」の一言では落ちつけずに腹が立ちました。

近くでソ連兵による略奪がありましたので、二階に通ずる階段に角材でくぐり戸を設けて、夜間は五寸釘で打ちつけていました。しかし設置したその夜に二人のソ連兵が入ってきて、時計を要求しました。主人が、「ニエツト！」と言って断ると、今度は押し入れの中を物色して赤い腰巻きを見付け、頭にかぶって喜んで出て行きました。恐怖のひとときでしたが反面、私たちには考えられない彼らの行為には笑ってしまいました。

略奪事件があつたので、ソ連軍司令部に抗議を申し

入れましたら、ソ連兵がきたときには、鳴り物で知らせてくれればすぐに上官が行くということになり、それからはどこかで打ち鳴らす音が聞こえると、私たちもそれに合わせて窓から打ち鳴らしていました。しかしこんなことがあっても、北満から見れば別世界のよりに平和な避難生活でした。

新京で昭和二十一年の新しい年を迎えましたが、新年早々から日本の脱走兵の搜索が厳しくなってきました。ある日、急に主人が、「皆さんに迷惑をかけては申し訳ないから、住所を変えるよ」と言い出しました。あまりにも突然のことでびっくりし不安を感じましたが、主人も脱走してここに帰ってきましたので、致し方なく賛成せざるを得ませんでした。

移転するところは、以前から話に聞いていました親友の渡野辺さんのところと分かり安心しました。渡野辺さんご夫妻は、気持ちのよい方で快く迎え入れてくださいました。親友とはこんなに温かいものかと初めて知り感謝をしました。その夜は話が弾み、独身時代に戻って昔話に花を咲かせて、楽しい友情の一夜とな

りました。

二人で商売も始めましたが、武士の商法なんとやらで成功はしませんでした。

長い間の社宅での共同生活にも別れを告げて、孟家屯の近くの二階建ての家に引っ越すことができました。気兼ね無しの生活となり、そのうえに満拓の退職金も入りましたので、当分の間働かなくとも生活ができるようになりました。それでも引っ越ししてから、悲喜こもごものことがありました。

喜びは一組の新婚家庭を誕生させたことですし、心配事は、主人が食中毒になり、一週間付き切りの看病で明け暮れたことなどで、いろいろな思い出がありました。

その年の春ごろになると、国府軍と八路軍との交戦が始まりました。いわゆる国共内戦で、大砲の音が遠くで聞こえると思うと間もなく一夜過ぎるころには、砲弾の炸裂音がすぐ近くで聞こえるようになります。戦火に巻き込まれては大変と思いいかにこの難から逃れるべきかと考えていました。食糧を確保する

ために街に出て、急いで帰る道すがら近道に入ると、孟家屯付近から発射音が聞こえてきます。するとすぐ前方で、砲弾の破裂音と共に木や土が飛び散るのが見られました。「姿勢を低くして走れ」と言って主人が走り出しましたので、私も中腰になって走り出しました。初めて体験する弾の下でしたし、初めて耳にする砲弾の爆発音でしたから、生きた心地がせず、家に帰っても体の震えが止まりませんでした。

六 引揚げ開始

昭和二十一年の春になりますと、新京でも引揚げの話が始まりました。皆さんとその話をしていると落ち着かなくなってきました。開拓団から避難してきた人たちが多く生活していた緑園地区から引揚げが始まり、安民地区はその次らしいということがあちらこちらでささやかれますと、各地区で埋葬していた肉親の遺体を掘り起こして、あらためて茶毘に付する姿が見られるようになりました。方々から火事の如くに煙があがり、忘れかけていた悲しみが戻ってきました。私たちも遅れないよう準備をしました。日当たりのよい

場所に埋葬してあったのですぐに掘り起こすことができ、その場で火葬をして、手造りの小さな箱にお骨を納めて抱きしめますと、子供の体温が何となく伝わってくるようで温かさを感じるようでした。

その後、孟家屯の幹部用の住宅に引っ越して間もなく、再び国共両軍の戦闘に巻き込まれてしまいました。一夜明けたら八路军に代わっていました。

五月になってやっと引揚げが現実となり、うわさのとおり緑園地区から開始されました。孟家屯の人たちもそわそわと落ち着かなくなりました。安民地区でも引揚げ手続きが始まりました。

主人は引揚団の本部付で、毎日本部に行きますので、私が一人で帰国準備をしていました。七月に入ると安民地区の引揚げが決定されましたが、そうなる毎朝毎夜、故郷の風景や肉親のだれかれの顔が浮かんでは消え、消えては浮かんで頭の中を駆け巡っていました。

昭和二十一年七月二十日、お世話になった思い出の多い孟家屯を後にして本部に集合し、夢にまで見えて

た祖国日本に向かって出発しました。手製のリュックサックを背負い、胸には小さな骨箱をさげて無蓋列車に乗り、乗船地のコロ島を目指しました。

コロ島での中国側の荷物検査は予想以上に厳重でした。特にお金を持っている人がいると、全員を帰国させないといわれていました。引揚船に乗船するまでは安心できませんでした。

棧橋に横付けされている引揚船を見ただけで、もう日本に帰ったような思いに浸りわくわくした気持ちになりました。船の中は木製の二段ベッドで、天井が低く立ち上がることはできずに中腰になって移動しました。しかしやっと乗船したという嬉しさで、狭いことも苦になりませんでした。

祖国の姿を早く見たいと思って、みんな甲板に出ていましたが、白波をけたてて船は一路、日本に向かっていました。「日本が見えたぞ!」という叫び声が目が覚めて、甲板に駆け上がりますとかすかにその姿が見えました。主人と一緒に無事に帰れた喜びに、主人と手を取り合って泣きました。

博多の土を踏んだときには、私の頭の中は今日までのことが走馬灯のようによぎっていました。私の渡満は一体何だったのか、新婚旅行という気持ちで満州に行き、そして終戦となり苦しい避難行、最後にはいとし子供まで失い、無一文の姿で祖国の地に立つ今の自分にむなしさをしみじみと感じました。

全身にDDTをかけられ、帰国手続きも終了して故郷に向かう汽車に乗りました。学生さんが、「ご苦労さまでした」と温かい気持ちでお世話をしてくださいましたことは嬉しいことでした。主人は無言で見えていましたが、複雑な気持ちで見えたのだと思います。国家国民を思い、学業半ばで戦場に行き、今は戦に敗れて引揚者となり、学生さんにお世話になっている運命に、感慨無量のものであったのだろうと思いました。

高粱食で生きてきた私には、丸小麦の弁当は何とも思いませんでしたが、祖国の食糧事情を見た思いでした。

途中駅の各県の学生さんの厚意に感謝しつつ二日間の旅を終え、肉親と涙で別れた小さな田舎駅に再び変

わり果てた姿で降り立ち、家路に向かう二人に、「ご苦労さまでしたね」と、温かい言葉で迎えてくれた人々に、無事に帰った喜びをしみじみと感じたものでした。

私たちの姿を見付けた父は、飛び上がらんばかりに喜びました。「ただいま帰りました」という言葉さえ途切れ途切れで、涙が先に流れるばかりでした。

七 引揚げ後の生活

毎日、喜びの涙に暮れる父と気丈夫な母に支えられて、健康も回復しました。母は体が大事だからゆっくり静養してから仕事をしなさいと言ってくれましたが、人生再出発ですから休んではいられません。食糧の無い時代なので、畑仕事から始めました。そのうちに食糧の買い出し、着物教室と順調に進みました。

二年後には食堂経営を始めましたが、子供たちの教育上の問題もあり、昭和四十年に上京しました。私は、日本伝統の美である和服を教えて頑張りました。

平和の中におりますと、苦労したことを懐かしく感じますが、再び東北地方（旧満州）に行きたいとは思

いません。しかし、佳木斯での苦しかったときに親切にしていただいた、満拓のボーイさんとその娘さんには、お会いして心からお礼をしたいと思えます。私の真剣な気持ちにボーイさん一家に伝わってほしいと祈ると共に、温かい厚意に対しまして心から深く深く感謝をする気持ちでいっぱいです。

私の生きた七十四年

富山県 山本 祥作

私は、大正十四（一九二五）年五月七日、富山県射水郡佐野村（現在の高岡市西佐野）で、父佐七郎と母ちよとの四男として生まれた。五月といえは農繁期の真ただ中で、農家にとっては最も忙しい時期であった。昭和七年三月、私が小学二年生のときに母が亡くなったが、父はその後再婚して、私たちは兄弟姉妹八人になった。

昭和十五年、私が尋常高等小学校の高等科二年のと